

素描 經濟學史

同文館

素描 經濟学史

杉原四郎 著



同文館

〈著者略歴〉

すぎ はら し ちゅう
杉 原 四 郎

1920年 京都に生まれる

1941年 京都大学経済学部卒業

京都大学助手，兵庫県立医科大学予科教授，
関西大学教授を経て

現 在 甲南大学経済学部教授，経済学博士

主 著 『ミルとマルクス』（1957年，ミネルヴァ書房）

『マルクス経済学の形成』（1964年，未来社）

『マルクス・エンゲルス文献抄』（1972年，未
来社）

『経済原論Ⅰ—「経済学批判」序説—』（1973
年，同文館）

昭和55年3月31日 初版発行

《検印省略》
略称—素描経済

素 描 経 済 学 史

著 者 杉 原 四 郎

発行者 中 島 朝 彦

発行所 同文館出版株式会社

東京都千代田区神田神保町1-41 〒101
電話(東京)294-1801～6 振替東京0-42935

© S. Sugihara

印刷：藤本綜合
製本：トキワ

Printed in Japan 1980

目次

Ⅰ 経済学史を学ぶ意義

一 経済学史の対象と方法

3

3

二 迂回生産としての経済学史

8

三 経済学史の基本線

11

Ⅱ 経済・経済像・経済学

一 経済像の二重性

15

15

二 経済像と経済学

19

三 現代の経済像

22

Ⅲ 古典派経済学の成立と展開

一 概観

25

25

	(1) 序説	25
	(2) 経済学誕生の条件	28
	(3) 古典学派の成立	30
	(4) 古典学派の発展	33
	(5) 古典学派の変容	36
二	アダム・スミス	39
	(1) 生涯と時代	39
	(2) 『国富論』	45
	(3) 学史的地位	57
三	リカードウ	62
	(1) 生涯と時代	62
	(2) 『経済学と課税の原理』	67
	(3) 学史的地位	73
IV	古典学派の変容とJ・S・ミル	78
一	一八四八年の経済思想	78

V

マルクス経済学の特質と要点

一 カール・マルクス

(1) 非凡な凡人のプロフィール 123

(2) 生涯の二つのハイライト 126

(3) マルクスの二つの顔 128

二 マルクス経済学の特質

(1) マルクス経済学の学史的地位 131

(2) マルクスの人物とその時代（一八四〇年代まで） 133

二 J・S・ミルの『経済学原理』

(1) ミル『経済学原理』の課題 78

(2) 古典学派と社会主義 84

(3) 古典学派と歴史主義 89

(1) 『経済学原理』の構成 95

(2) ミルの利潤論の特色 103

(3) 人間的進歩の経済思想 110

95

123

131

123

- (3) マルクスの人物とその時代（一八五〇年代以降） 136

- (4) 『資本論』の対象と構造 140

- (5) 比較経済体制論としての『資本論』 148

三 マルクスのリカードウ批判

- (1) リカードウ・ノート 152

- (2) 『経済学批判』のリカードウ論 154

- (3) 『要綱』のリカードウ論 156

- (4) 利潤率低下の問題 158

- (5) 恐慌論 160

四 マルクスの死とその後

- (1) しかばねを越えて 163

- (2) 『資本論』の続巻 164

- (3) 『資本論』と現代 166

VI

一八七〇年代とは何か

- (1) 一八七三年恐慌と大不況 170

VII

新しい経済像を求めて

- (2) 限界革命とその背景 173
- (3) マルクス主義の国際的浸透 177
- (4) 古典学派的経済像にかわるもの 181

184

VIII

日本経済思想史散歩

- (1) 蘭学・英学・独逸学 193
- (2) 福沢諭吉の経済思想 195
- (3) マルクスと日本 197
- (4) 河上肇の『貧乏物語』 198
- (5) 福田徳三と手塚寿郎 200
- (6) 『東洋経済新報』と石橋湛山 201

193

索引	218
あとがき	213
(7) 日本の市民社会論	203
(8) 日本のマルクス経済学	207

素描
經濟學史

I 経済学史を学ぶ意義

一 経済学史の対象と方法

経済学史をはじめて学ぶ人のために、経済学史の対象と方法、経済学史を学ぶことの意義、それからこれを学んでゆくうえの心構えなどについて、すこしのべておきたい。

経済学史は経済学を歴史的に研究する学問である。つまり、「経済学史」という名称のなかの、「経済学」というところがこの学問の研究対象を、そして「史」というところがこの学問の研究方法をあらわしているわけである。研究対象が経済学であって経済ではない、また研究方法が歴史的であって理論的でない、ここに経済学史という学問の特色がある。その点をあきらかにするために、経済を研究対象とする点で経済学史と共通性をもつ経済理論と、歴史的方法をとる点で経済学史と共通する経済史、それから経済学を研究対象とする点で経済学史と類似する経済学方法論、以上の三つの学問と経済学史との関係をしめす図を、つぎにかかげておこう。

1 経済学史の対象と方法

経済学	経済	研究対象	研究方法
		経済学方法論	理論的
経済学史	経済	経済史	歴史的

みられるようにこの四つの学問は、それぞれ特色をもちながらも、相互に重なり合うところもあるという関係の、いわば親類筋にあたる学問群である。そしてこの四つの学問は、経済学という学問の基礎的・一般的な部分を形成するもので、経済学のヨリ分科した専門分野はこの部分を基盤としてなり立っている。その意味で経済学史は、経済学の基礎の一角をになっている重要な学問といえるだろう。多くの大学の経済学部のカリキュラムで、経済学史が必須科目またはそれに準ずる地位をあたえられているのはそのためである。

ところで経済は人間の社会生活の一つの局面であり、その局面のなかでの人間の諸行動の関連から生ずる経済現象は、ヨリ広範な人間の社会生活から発生する社会現象の一種である。したがって経済を一面とする社会を全体としてその対象とする学問もありうるわけで、逆にいえば経済学は社会全体をとりあつかう社会科学の一部門としてなり立つ、といえる。そこでこの社会と社会科学とを前掲の図におこむと、つぎのようになる。

1 経済学史を学ぶ意義

社会科学は、上掲の図の(1)と(3)とにある四つの学間が形成する一般理論と、経済学や政治学などの特殊な社会諸科学とからなっている。そこで上掲の図は、経済学のみならず、他の社会科学、たとえば教育学とか政治学とかにもあてはまる。すなわち(2)と(4)にある経済のところを教育とか政治とかに入れかえればよいわけで、そのように書きかえられた図によって、社会科学↓経済学↓経済学史と、社会科学↓政治学↓政治学史、社会科学↓教育学↓教育学史にもなり立つことがわかる。

以上が、社会科学という学問の大きな分野のなかで、経済学史がどのような位置をしめるのかを見当づけていただくための、形式的な説明である。しかし経済学史という学問の実質的な位置づけをするためには、すくなくともつぎの三つの点について考えておく必要があるだろう。

(4) 經 濟 學	(3) 社 會 科 學	(2) 經 濟	(1) 社 會	研究對象 研究方法的
經濟學方法論	社會科學方法論	經濟理論	社會理論	理論的
經濟學史	社會科學史	經濟史	社會史	歷史的

第一は、経済は社会生活の一つの局面であるというだけではなく、経済は社会生活全体のなかでどのような意義をもっているか、他の生活領域、たとえば教育とか政治とかにたいしてどのような関係にあるのか、という問題である。

第二は、社会の史的発展が一般にどのような法則にしたがうか、またこれは第一の問題にむすびつくわけであるが、社会の発展のなかで経済の史的発展がどのようにおこなわれ、それが社会全体の発展とどう関連するか、という問題である。

第三は、学問、とりわけ社会科学、なかでも経済学の成立と展開を、社会全体の構造と発展とのなかでどうつかむかという問題である。第一と第二の問題が前掲の図表の(1)と(2)とのあいだの関係にかかわるのにたいし、第三の問題は(1)と(3)、(2)と(4)との関係にかかわる問題といえるだろう。

こうした問題はいずれも複雑で多岐にわたる論点をふくんでいて、解決することが困難なものばかりであるが、現代の社会科学のなかで、これらの諸問題を考えるうえにもっとも有力な指針となりうるのは、マルクスの唯物史観であると思われる。よく知られているように、唯物史観の骨子はマルクスの『経済学批判』(一八五九年)の緒言のなかにふくまれており、そこには、(一)社会の土台は経済とそのうえになり立つ上部構造、という観点からする社会構造論、(二)生産力と生産関係との動的統一を基軸とする社会変動論、そして(三)社会の動的構造のなかで位置づけられた社会的意識形態ないしはイデオロギー形態論が簡潔にのべてあり、われわれがうえにあげた三つの問題を考える場合の指針を提供している。私はそういう意味で、マルクスのこの文章を、経済学史の学習にあたってもよく含味する

ことをおすすめしたい。

唯物史観の骨子をのべた『経済学批判』の緒言には、経済学の歴史そのものについてはふれていないが、マルクスの唯物史観を経済学史に適用すればどうなるか、という範列を、われわれは彼が『資本論』第一巻第二版（一八七三年）に書いた「後書き」のなかに見いだすことができる。マルクスはそこで、一方では、イギリスにおける経済学のリカードウからJ・S・ミルにいたる史的展開を、イギリス資本主義の発展過程とかかわらせながらあとづけるとともに、他方では、後進資本主義国ドイツにおける経済学がどのような特徴的な様相を呈することになるかということを、そうしたイギリスでの展開と比較しながら説明している。ここにはドイツやイギリスだけでなく、フランスのシスモンディ（一七七三～一八四二年）やロシアのチエルヌイシェフスキー（一八二八～一八八九）のような経済学者のことも言及されていて、一九世紀のはじめから一八七〇年代初頭ごろまでの西欧経済学の流れがみごとに要約されている。

河上肇（一八七九～一九四六）は一九二六年に京都大学での最後の経済学史の講義をはじめにあって、『経済学批判』緒言のなかの唯物史観を定式化した部分と『資本論』第二版「後書き」のなかの経済学界を史的に展望した部分とを提示し、この二つの文章を一年間の講義の「導きの糸」にした。いとこのべた（河上肇、杉原四郎校訂『経済学史講義』大月書店、一九七三年を参照）。私もまた経済学史の講義のなかで、この二つの文章からくみとりうるマルクスの考え方を、十分に活用してゆきたいと思っている。

二 迂回生産としての経済学史

前節で私は、経済学史が経済学の一般的基礎をささえる一つの支柱という重要な学問であることを指摘したが、経済学史はどうしてそのような意義をもっているのだろうか。「故きを温(たづ)ねて新しきを知る」という『論語』の言葉をもって、一応はこの疑問にこたえることができるであろう。だが経済そのものの歴史をさぐる経済史と、経済学の歴史をあとづける経済学史とでは、温故知新という歴史的研究の効用度が、いささかちがうのではないか、という疑問が起るかもしれない。経済の現実には、いつでも古いものと新しいものがまじりあつて動いているのだから、その現実をつかまえるためには、経済史的な探究が必要であり有用であることはわかるけれども、混沌たる現実から一般的・本質的なものを抽象してつくりあげた理論体系である経済学については、歴史的研究など不要ではなからうか。学問の世界では、古いものは新しいものによって克服され発展させられたからこそ古くなつたのだから学問のいっそうの進歩のためには、もっとも新しい現代の学問から出発すればよいのであつて、それよりも不完全な過去の学問のことをせんさくすることは無用のわざではないか、という疑問である。

この点についてまず考えていただきたいのは、経済学という学問は、スタートしてからの歴史がいまだ比較的新しく、資本主義経済というこの巨大で複雑怪奇な現実を、あますところなくきわめつく